

第11章 教室における社会史 (Social history in the classroom)

Claire Golledge

村田一朗 (広島大学大学院)

m203963@hiroshima-u.ac.jp

著者情報

Claire Golledge: シドニー大学で教育学に博士号を取得した。博士号の取得の前は、NSW の中等学校で歴史と法律を教えていた。広範な授業観察と、模範的な歴史教師の教室の実践を調べるために学生とのフォーカスグループインタビューを使用した。What does it mean to teach history well? Exploring the practice architectures of exemplary history teaching.



www.clairegolledge.net (最終閲覧日: 2021年7月19日)

重要用語

Historiography: 歴史編纂・史料編纂

Social history: 社会史

Epistemological turmoil: 認識論的混乱

本章の概要

社会史を教えることが過小評されてきたものの、社会史を教室に取り入れることは、民衆の姿から当時の文脈を捉え、生徒の歴史理解を促進するものであり、教師にとって学校の歴史教育がいかにマイノリティの声を排除してきたかを相対化することに意義がある。

議論したい論点

・歴史の教師教育として、社会史(民衆やマイノリティの歴史)を教えることができるようになるべきか、いなか? なるべきであれば教員養成課程はどう変わる必要があるか。歴史教師として最低限ないといけない資質とは何か。

はじめに

・本章の目的: 歴史教育の課題として深い歴史理解を育むことと同時に、魅力的な学習経験を提供することがある。そのため本章は「教室に社会史を取り入れることで、正式な歴史 (official history) とされているものを再構成 (reframing) し、歴史的な問題や時代への関連した導入 (relatable entry point) を提供すること」(142) で、課題への示唆を探ることである。

・歴史教育における社会史の課題: 現在、社会史を教えることの重要性が過小評価されている。というのも世界史や自国史の流れ (the grand sweep) を理解させようとする社会史の

存在は忘れられ、実際に社会、国家、指導者の盛衰、戦争の経過の理解を促すものとして社会史を扱うとトリビアのようになることが問題になっている。

・社会史の意義：社会史を教えることは歴史上の主要な瞬間 (major historical moments) を文脈化し (contextualise)、想像させることができる。同時に社会史を教えることで、特定の語りやテーマが忘れられている理由を説明でき、より複雑な metahistorical ideas を授業で扱う機会となる。

・社会史の定義と学際的な動向：「最も基本的には、一般の人々 (民衆) の生活や社会的世界を探ることに焦点を当てた歴史へのアプローチ」(146) と定義される。「新しい」社会史への注目は 1960~1970 年の歴史を下から見ることの関心から生まれた (WASP 文化への抵抗)。社会史は、経済史・労働史・歴史考古学 (historical archaeology) から影響を受けることで、女性史や家族の歴史などの歴史研究のテーマを生み出してきた (Waterhouse, 2009)。

・社会史的アプローチの対象：社会史的アプローチは、社会の構造や、その社会の中で人々がどのように相互作用しているか、もっとマイクロなレベルでは、個々の家族や家庭、あるいは道で遊んでいる子供たちの集団などに関心を持つことを意味する (Treggiari, 2002)。→旧来の「歴史とは何か」という定義 (誰の歴史か?) に対して批判的に考えることが求められる。

なぜ教室で社会史を扱うのか—rationale—

(1) 確かな (歴史理解の) 基盤としての社会史 (Social history as 'solid ground')

・ある出来事や時代を社会史のレンズを通して学習することは、学生の歴史的理解をより強固に、魅力的に、意味のあるものにすることができるから。というのも、以下の2人に知見に基づいている。

・社会史とは、「活動的な意味での歴史であり、パンを焼く香りと内臓の臭いが混ざり合い、騒々しいストリートライフの音が家庭内の静かな時間に侵入してくるような、物事を行う人々の民族誌的な肖像である」(Tom Griffiths、2016: 287)。

・社会史には、歴史的な時代や運動をまとめたり、一般化しようとする見落とされがちな歴史の「現実性 (realness)」を照らす能力がある (Bédarida, 1991)。

・例えば、オーストラリアの初期植民地時代の歴史として、The Rocks が挙げられている。社会史的なアプローチを用いることで、The Rocks が「粗野で騒々しい囚人や兵士、水夫、街のギャングなどの植民地が繁栄した近代的な地区」であるというステレオタイプを考古学的調査で発見された品々や、政府や個人の記録を用いることで、「抑圧された囚人や労働者階級の人々が住む単なるスラムではなかった」ことを示し、むしろ、女性や男性がお金を稼ぎ、物質的な所有物を蓄積し、家族やコミュニティを形成していたことを理解させることに寄与できる。

・The Rocks について：<https://jp.sydney.com/destinations/sydney/sydney-city/the-rocks>

(2021年7月23日最終閲覧)

(2) 教室への鏡 (A mirror to our classrooms) としての社会史

- ・(教師教育として) 学校で学ぶ歴史 (school-based history) がアイデンティティやナショナリズム、帰属意識といった広いテーマを語ることを認識できるから。
- ・現在の歴史教育は文化的・民族的マイノリティ (アボリジニやトレス海峡諸島民など) の人々の声や経験を排除している。
- オーストラリアの歴史を不正確に表しているだけでなく、生徒の多様な想像力や興味を引き出せない。
- ・生徒は家族や場所との関わりから生じる個人的な歴史観 (notions of history) を教室に持ち込む (Seixas 1996: 766)。
- 社会史は、個人的な歴史をより広い物語の一部として理解するという認知的な飛躍を助けることができる。具体的には公式な歴史物語に位置付けたり、むしろ切り離して理解することで、歴史的な運動やイデオロギーとの関わりで説明できるようになる。
- ・社会史は、地域の歴史、オーラルヒストリー、祖先の概念との強い関係を通して、オーストラリア先住民の声や経験を排除し、アボリジニやトレス海峡諸島民の歴史の知り方や理解の仕方を切り捨ててきた公式史料 (official historical records) の不均衡 (imbalance) に、より直接的に対処することができる (Harrison 2012: 7)。

社会史を通して歴史的思考を育む

・歴史的なパースペクティブ (Historical perspectives)

- 社会史は、ミクロレベルの歴史を見ることに重点を置いているため、整然とした、あるいは単純化された歴史的説明を混乱させ、「大観的な歴史 (big picture history)」に対してより微細な文脈 (nuanced context) を作り出すことができる (Cohen 2014: 80)。
- 壮大な物語から離れて、社会史的な視点で歴史を見れば、より複雑な歴史の理解へと向かうことにつながる。複数の、しばしば競合する、国の歴史に関する解釈を考慮することで、生徒をより明確に歴史的思考に関与させることができる。

・証拠 (Evidence)

- ・歴史的な裁判記録、新聞報道、遺言書、政府や慈善団体の書類などは、一般市民の日常生活や世界を洞察するために社会史家がよく利用するものの、それらは主に識字率が高く、ある程度の社会的・政治的権力を持っていた人々によって書かれた資料である (Shedd 2007: 26)。
- ・労働者階級、女性、子ども、移民、アボリジニやトレス海峡諸島民など、日常生活を営む人々の声や経験は、沈黙しているか、せいぜい媒介されているにすぎない。
- このような資料を検討し、学生にその利用と限界の両方を考えるように促すことで、収集

し、時間をかけて受け継いできた資料の中に、誰の過去が保存されているのか、そして誰の声が残されているのかについて考えさせることができる。

→このような公式記録に加えて、オーラルヒストリーや家族の物語、文化的な遺物や衣服などの日常品、大衆紙や雑誌、広告などを利用することで、歴史的な証拠とは何かについて生徒の理解を深めることができる

教室に社会を持ち込むために

・社会史をとり入れるためには、既存のカリキュラムを変更し、スペースを作ることが求められる。

(1)十分にエンパシーを働かせる (Do empathy well)

・学習対象となる歴史的な時代において、人々の社会構造や人間関係、家庭生活、生き立ち、所属するコミュニティ、仕事、富のレベル、特定の社会的役割を支える理由などを理解させなければなりません。

→伝統的な歴史的資料の外に目を向けて、人々の社会生活の遺物や証拠について考える必要がある。

→過去の日常生活の性質をより確実に理解することは、過去に対する深い共感的な理解を深めるための重要なステップであり、個人的な道徳的視点を離れて、歴史的な出来事や考え方を文脈の中でよりよく評価することができるようになる (Lee & Shemilt 2011: 40)。

(2)導入として社会史を用いる (Use social history as an entry point)

・ほとんどの歴史的トピックは、社会史の観点からアプローチしたり、生徒に重要な文脈と理解を与え、歴史的探求を始めるための強固な基礎を作ることができる。

・生徒たちの家族と第一次世界大戦とのつながりを調べる。地元の新聞記事を読めば、戦争当時の生徒の地元コミュニティの生活についての洞察が得られるかもしれない。「軍隊だけでなく社会も戦争をする」という重要な文脈上の理解を生徒に定着させるのに役立つ。

(3)史料編纂を理解できるようにする (Help students make sense of historiography)

・歴史の授業では、史料編纂について教える時間や場所がほとんどないことが多い。歴史上のさまざまな出来事や人々について教えようとするあまり、歴史的な作品における出来事や人々の選択、解釈、表現についての幅広い問題を議論する機会を失ってしまうことがよくあります。

・社会史は、公式資料や支配的なナラティブ (dominant narratives) に代わるものを提供する一方で、歴史が継続的な「認識論的混乱 (Fallace & Neem 2012: 331)」を特徴とする解釈的な学問であり、異なるグループや歴史家が時間の経過とともに問題や出来事を異なって理解してきた (Parkes 2007: 126) ということを学生に示す役割を果たす。

→このような活動は、歴史家がどのように結論を出し、証拠に基づいて議論を行うかを生徒と議論するきっかけとなり、また、歴史上の出来事について異なる歴史家がどのように異なる結論を出すかを生徒が理解するための分かりやすい方法となる。

(4)生徒に歴史を体験させる (Let your students experience the history)

・教室で社会史を活用する最も魅力的な方法の一つは、生徒自身に社会史を探究させることである。

- ・興味深い時代や出来事を経験した知人に、オーラルヒストリーのインタビューをしてもらう。
- ・地元の公文書館に記録を請求する方法や、オンラインリソースを使って戦史や移民に関する記録を探す方法を教え、それらの記録から何を学ぶことができるかを一緒に読む。
- ・生徒が自分の家族やコミュニティの歴史について質問したり、重要な写真や映像を使って自分の家族の社会史の例を共有したりすることを促す。
- ・古い雑誌や新聞に掲載されたレシピや自分の家族の歴史から、食の歴史を考える。昔のレシピは、昔の人々がどのように農業を営み、買い物をし、料理をし、生活し、食べ、祝っていたかについて、何を教えてくれるのか？
- ・昔の学校の写真やニュースレター、年報などを生徒と一緒に見て、時間の経過とともに見られる変化について話し合う。「家庭科」などの科目の登場と消滅に気づくかもしれません。これを利用して、ジェンダーと教育の歴史について話し合うこともできます。
- ・地元の新聞を読んで、長い間忘れられていたかもしれないが、当時は熱狂的に争われていた地元の物語や論争や紛争の場所を特定する。

結論

社会史は、生徒が歴史を直接体験する機会を提供する。歴史的な時代や出来事について調べ、証拠を解釈し、自分なりの結論を出すというプロセスに生徒を参加させることができる手段となる。学問的な意味での歴史の理解を深めることができるだけでなく、このような新しい視点から歴史を考えることで、過去に対するより洗練された多次元的な理解を深めることができる。